

# 溺愛フレンズ

目次

耽溺  
フレンズ

263

執愛  
フレンズ

239

溺愛  
フレンズ

5

溺愛フレンズ

緊張と迷いのせいだろうか。落ち着かなくて、私——川崎ちひろは両親との待ち合わせ前にもう一度お手洗いにいった。

鏡に映る私は、二日酔いのせいもあってかあまり顔色が良くない。もう二十七歳。一晩の無茶が翌朝肌に表れる年齢になってしまった。

それに何より今日は、とても微妙な表情を浮かべている。

「どうしよう……本当にいいの？ 紹介しちゃったらもう後には引けないよ」

鏡の中の自分に問いかける。

ここは都内にあるホテル。頭の固い両親のために、それなりに格式高いところを選んだつもりだ。私も今日のこの場に合わせて、いつもは着ないような紺色のワンピースを身につけ、ストレートの黒髪をハーフアップにしている。できるだけフォーマルを意識したコーディネートだ。今朝、大急ぎで調達したので、ワンピースは新品。しかも、私じゃ絶対手を出せない高級ブランドのものだった。

私は今日、人生の一大イベントに踏み出そうとしている。

だけど、相手がとにかく予想外で、頭がついていけずにいた。

「まさか本気で、『友達結婚』なんて」

昨夜は酔っていたこともあって、その造語がやたらもつともらしく聞こえた。だけどそんな言葉、これまで聞いたこともない。

——それを私に提案した男は、大学時代からの友人だ。

悪い奴じゃない。頭の回転が速く機転が利くので、昔から何かと助けられることが多かった。頼り甲斐のある男だと思う。

話していて飽きないし、会話のテンポも合う。一緒にいれば楽しい。ただしそれは、飲み友達として彼を語るなら、だ。

そんな彼と、酔った勢いで結婚することになってしまった。正直わけがわからない。本当にいいんだらうか？

答えが出ないまま、その男を待たせているカフェラウンジへ戻る。

テーブル席のソファに座る彼——高梨諒は、たくさんの人がいるラウンジの中で一際目立っていた。

品の良いスーツに身を包み、スマホの画面に目を落としている。ただそれだけなのに、竹まいに優雅さを感じさせる。

立てば百八十センチを超える長身、そのうえモデル張りの綺麗な面差しとくれば人の注目を集めて当然だろう。

切れ長の目の中央にあるブラウンの虹彩は、見るものに優しい印象を抱かせる。髪色も同じブラウンで、触れると柔らかそうだ。

……見た目がいいのは前からわかってたけど、ここまで飛び抜けてたっけ？

社会人になってからは薄暗いバーで飲むばかりで、日の高いうちに会うのは久しぶりだから、そう思うのかもしれない。彼とは長い付き合いだというのに、今更ながらにその外見スベックの高さに気づかされた。

だからなのか、今日はなんとなく近寄りがたい。

それとも夕べの一件で、私が妙に意識してしまっているから？

ふう、と深呼吸をして気持ちを落ち着ける。テーブルに近づき、彼の斜め向かい——お手洗いに立つ前と同じ場所に腰かけた。気づいた彼がスマホから顔を上げ、ゆったりと笑みを作る。たったそれだけでその場が華やいだようだった。

「ご両親、遅いな」

「電車が遅れてたみたい。でももう着くつて、連絡が来てた」

本来なら緊張するのは彼のほうだろうに、一切そんな気配は感じさせない。そんなところを頼もしいと思っつていいのだろうか。

コーヒーカーップを手に取り、口に運んだ。少し冷めて温くなったそれが、ほろ苦く感じる。

「ねえ、諒。本当にいいの？」

今朝から何度目かの質問を口にした。頭の中では、何度目どころかずっとエンドレスで続い

るのだけれど。

「逆に何が問題なんだ？」

問い返されて、うぐぐ、と言葉に詰まった。

「ちひろは今日、両親に結婚相手を紹介しなければいけない。俺は俺で、結婚することでクリアできる問題がある。これ以上の案なんてもうないだろう」

「それはそうなんだけど……」

「何も騙そうつてわけじゃない。本当に結婚するんだからご両親も安心するだろうし、ちひろも望まない相手と結婚せずに済む。気に病むことはないよ」

いや、本当に結婚しちゃうつていうのが問題であつて！

そう言おうとした瞬間、頭の中に蘇ったのは両親から持ち込まれた結婚相手のことだった。

いやだ。絶対、あの人とは結婚したくない……！

ぞぞ、と寒気を感じて背筋を伸ばしたとき、目の端にエントランスの回転ドアを抜けてくる両親の姿が映った。

「……来た」

母はともかく、相変わらず父はお堅い顔をしている。ごくりと唾を呑み込む私の横で、彼がすつと立ち上がった。

「行くぞ」

諒に続いて立ち上がろうとすると、まるでエスコートでもするように私の目の前に大きな手が差

し出された。

「え」

迷いが生じる。……この手を取ったらもう、後戻りはできないから。

忙しい心臓の鼓動を深呼吸で鎮め、おずおずと指先をのせる。直後、しつかりとした強さで指を握られ、それに励まされるように立ち上がった。

両親の前に、私はよほど心許ない目をしていただろう。諒が少し腰を屈めて、耳元で囁く。

「大丈夫だ、俺がついてる」

迷いだらけだったはずなのに。

その一言で、ふっと心が楽になった気がした。

\*\*\*

元々、結婚願望は強いほうだったと思う。子供の頃はウェディングドレスに憧れたし、うちの家は厳格で重苦しい雰囲気の漂う家だったから、優しい夫と子供がいる、明るい家庭に憧れた。

日本家屋じゃなくて、洋風の一軒家。小さい庭には盆栽じゃなくて蔓薔薇のアイアンポーチ。玄関先に並ぶ可愛い自転車と三輪車。

共働きでもかまわない。でも家事はちゃんとしたいし、料理上手で綺麗なお母さんでいたい。趣味で好きな絵を描くのも続けたい。

それと、結婚相手は優しくて穏やかな人がいい。間違ってもお父さんみたいな、顔も性格も四角い人はいやだ。

もちろん、今挙げたのは子供の頃の夢そのままだ。大人になるにつれ夢見がちな部分は淘汰されていって、比較的实现可能な夢になっていったんじゃないかと思う。

しかしながら、これまでふたり付き合った男性がいたけれど、結婚の話には至らずに別れてしまった。ちなみにいつも私は振られるほうだ。

急かしているつもりはなかったけれど、結婚を意識しているのが伝わったのかもしれない。

だけど、そのどこが悪いの？ 好きだから結婚を考えるんじゃないの？ 重いと言われても、男の人と結婚を考えずに付き合うのは、私には無理だった。

しかも二人とも、別れ方が酷い。一方的にメッセージを送ってきてそれっきりだ。顔も見ず、別れの理由も告げないなんて、あんまりだと思う。

そんなとき、いつも私の愚痴聞き役になってくれたのが、諒だった。

——男のほうに結婚を考える余裕がなかっただけだ。

——大体、お前は男を見る目がない。

その言葉に少し救われ、愚痴るだけ愚痴つたら次に向けて頑張ろうなんて考えていた。

まあ、ある日、それどころじゃなくなるんだだけ。

それは、今から約三か月前——昨年十一月におこなわれた祖父の法事での出来事が発端だった。遥か昔からの家系図なん

てものがきちんと管理されていて、代々それを本家で受け継いでいく。分家がいくつもあり、どう繋がりがあるのかわからないような遠い親戚と、今でも家同士の付き合いがあった。

その本家を継いだのが私の両親だ。古い家を守ってきただけあって、特に父親の頭は固い。跡継ぎは長男である兄が覚悟を決めているようなので心配いらないけれど、私に対しては早く結婚して身を固めるとずっと言ってきた。

まだ二十代だ。今時、この年齢で結婚を急かされるなんて勘弁してほしい。そう伝えても両親は受け入れてくれず、二十五歳になった頃からは見合いをしると強く勧められ続けた。

冗談じゃない！ 結婚相手くらい自分で探すし、ちゃんと恋愛をしてお互いの気持ちを育み、愛し合って結婚したい。

だからのらりくらりと躲かばしていたのだが、ついに先日、法事の後の酒の席で、遠い親戚の男を結婚相手にどうかと紹介されてしまった。

分家の長男。旧ふる家のしきたりに染まったその人は、私より十歳上の、嫁は子供を産む機械くらいにしか思っていない人だった。

なぜ知ってるかって、親戚の集まる酒の席でいつも、嫁は若いのに限るだとか嫁は夫に従ってりゃいいんだとか大声で語っているからだ。そんな考えだからその年まで独身なんじゃないの!? 聞いているだけで腹が立つてくるので、いつもなるべく近寄らないようにしてたのに。

……その人と！ 結婚しろと！ 言うのか！

『今、結婚前提に付き合ってる人がいるから！』

気がつけば大嘘を吐いていた。そして、その日のうちに一人暮らしをしているマンションに慌てて逃げ帰った。

ぐずぐずしていると、外堀から埋められかねないと思ったからだ。田舎、超こわい。いや、怯えている場合ではない。早く、相手を探さないと……!

結婚前提かどうかはさておき、実際に彼氏くらいは作らなければ、絶対に結婚させられる!

逃げ帰った程度で引き下がる父親ではない。本当に相手がいるのか確かめようとするのはわかりきっていた。そして嘘がばれば間違いない、待っているのはあの男との正式な縁談だ。

ぜったい、いや……! !

焦った私が頼ったのが、婚活アプリである。結婚願望のある者同士が出会うのだから、話は早いとはいえ、色々と怖い噂も聞くので、ちゃんと身分証明等が必要な、安全そんなところを選んだつもりだ。

運良く、そこで知り合った人と意気投合。五回会って、お互い将来を見据え、まずは付き合いおうと決めた。これでようやく両親に紹介する段取りがついた、そう思ってたのに。

明日、いよいよ両親が田舎から出てくるというときになって、いきなり別れを告げられたのである。しかも顔を合わせるでもなく、電話でもなく、携帯に届いた一言のメッセージで。

どうして、どうもこいつも別れの言葉をメッセージアプリに頼るのだ!

しかも今回もふられた理由がわからない。やっぱり両親に会ってほしいというのはまだ早かった?

とにかく考え直してほしいと説得するべく電話をかけたが、当然すでに通じなくなっていたのだった……

「まったく。婚活アプリなんてものに頼るからだ」

行きつけのバーのカウンター。

憔悴<sup>しよすい</sup>し、がっくりと項垂<sup>うなだ</sup>れる私の隣で、諒は呆れた声を上げた。

大学で同じ講義を受けることが多かったのとバイト先が一緒だったことで、友人の中でもよくふたりで飲みに行く仲だった。卒業してからもその関係は続いていて、しかも勘がいいのかなんのか、私が失恋するたびにいいタイミングで連絡を寄越してくる。

今夜もまた、呆然としているところに諒から飲み誘いがあり、馴染<sup>なじ</sup>みのこのバーで待ち合わせた。

「……だって。婚活アプリなら相手も結婚したがってるんだし……うまくいくって思ったんだもん」  
そもそも今回、婚活アプリに頼ったことは諒に話していないのに、なぜ知っているのか。

おそらく情報を流したのは、共通の友人である藤原菜月<sup>むつらなつき</sup>だろう。先日彼女と飲んだときに、婚活アプリでいい人と知り合って、どうにか親戚との結婚は回避できそうだと報告した。それが、このザマだ。

……菜月め！ 余計なこと話してー！ もう、泣きたい。

心の中で呟くと涙が本当に滲<sup>じ</sup>み出そうになって、慌てて目頭に力を入れた。

向こうだって結婚したいからアプリに登録してたんだろうに、そんな相手にすら逃げられたなんて、情けないし恥ずかしいし、自信もなくなる。そりゃ、自分がそれほどいい女だとは思っていないけど、そんなに悪くもない……つもりだったのに。

「……浅はか」

「うるさいなあ」

へこんでいるところに追い打ちをかけないでほしい。

「なんで俺に相談しない」

「相談したってどうしようもないでしょ。それにそんな余裕もなかったし……マスター、おかわり！」

カウンターの向こうには、五十代くらいの、ひよろつと背が高い、人の好きげなオジサマが立っている。彼がこのバーのマスターだ。空のグラスを差し出すと、マスターは困ったように眉尻を下げた。

「ちひろちゃん、もう限界じゃない？ そろそろやめたほうが」

「俺が見てるからいい。作ってやって」

マスターが心配して忠告してくれたけれど、諒のひとことで新たなグラスが用意された。まるで涙の色のような、淡いブルーのカクテルだ。

「ううっ！ マスター、こんな哀しい色のカクテル飲ませないでようー！」

「えっ！ ごめん、哀しいときにはしゃいだ色のカクテルもどうかと思って」

「飲むよ、飲むけどね！」

「マスターにまで絡むな、お前は」

ぺん、と頭のとっぺんを軽く叩かれた。その拍子に、じわ、と目の奥が熱くなってくる。せつかくさつきは我慢したのに、このままでは零れてしまう。

「だって、酷い。……明日、両親に合わせる約束してるのに」

カクテルを一口呷って、涙を誤魔化すように、つい大きな声でぼやいた。

私の言葉に、「ちよつと待て」と諒が棘のある声を出す。

「……出会って間もない男とそんなとこまで話を進めたのか」

「あ、うん……ちよつと事情があつて」

「事情？ 聞いてない」

そりゃ、言っていないからね。菜月もそこまでは諒に話さなかったようだ。

「お前、馬鹿か。なんだってそんなよく知らない相手と」

「えっ……だって、婚活ってそういうものでしょ？」

いや、いくら婚活でも早すぎる展開だったかもしれないけど。

私だって、緊急事態でなければこんなに急いだりはしなかった。だけど、どうしても、あの親戚の男との結婚だけは嫌なのだ。

「それにまだ結婚が決まったわけじゃなかったし。とりあえず早めに両親に会ってくれたら助かるってお願いしたら、いいよって言ったから」

「で、直前になって逃げたってことか」

「そう！ なんで!？」

「……あまりの重さに、怖気づいたつとこでしようかね？」

マスターがぼろりと零した一言に、私は愕然とする。婚活アプリで知り合った人にすら私は重量級の扱いをされるのか。

「マスター酷い！」

「いや、私が重いと思ったわけじゃないですって」

「あああ、どうしよう。明日、親が来るのに」

「そんな中途半端な男、紹介しなくて正解だ。向こうから別れてくれて良かったじゃないか」

慰めているつもりなのだろうけれど、彼のことを見たこともないのに『別れて良かった』は酷い。言い返そうと伏せていた顔を上げたとき、マスターがぼそりと呟いた。

「……別れて良かったのは、どっちゃやら」

見れば、マスターはちよつと疲れたような顔で頬を引きつらせていた。私から目を逸らして、そつぽを向いている。何かちよつと意味ありげに聞こえたけれど、それを問い返す前に諒の手が私のカクテルグラスの脚をこん、と叩いた。

「良かったんだよ。そんな別れ方するやつがいい男とは思えない」

飲んで愚痴って忘れてしまえ、という意味だろう。

そのとおりなのかもしれない。

言われるままに、グラスに残っていたカクテルを一息に飲み干した。くらりと少しの眩暈を感じる。これで何杯目だろうか。でもまあ、毎度のことなので、諒がちゃんと家まで送ってくれるだろう。

「大体、ちひろは本当にそいつと結婚したかったのか？」

「……そんなの今聞かれてもわからない」

都合の悪い質問をされて、私は逃げた。

諒の言葉は私の頭の片隅にありながらも、答えが出せずにいたことだった。

結婚はしたい。だけど誰でもいいというわけじゃない。

逃げた相手の顔を思い浮かべると、それほど嫌な相手ではなかったと思う。初めて会ったときの、緊張気味の笑顔がちよつと可愛らしかった。好きになれそう、と思ったから何度か会ったのだ。

だけど、気持ちを育てるよりも先にこんなことになってしまった。

「俺は案外、ちひろの間口が広いことに驚いてる」

いつのまにか置かれた新しいカクテルは、オレンジ色の明るいイメージだ。一口飲むと、柑橘系の爽やかな甘みが口の中に広がった。

「間口って？」

「そういうやり方で相手を探せるのなら、もつと視野を広げて身近にいる男を選べばいいのってことだよ」

「身近にいないからこうなってるんでしょ」

何を今更なことを言っているのか、と眉をひそめると、諒が笑顔のまま固まった。それを見て、なぜかマスターがくくつと笑いを囁み殺す。

「え、何？ 私なにか変なこと言った？」

意味がわからず首を傾げる私に、諒の手がまた、私のグラスに触れて促した。

「何でもない。ほら、もつと飲め」

そう言った諒の目は、笑っているのになんだか妙に圧力を感じさせる。既に結構飲んでいる自覚があったが、その目力に負けてグラスを手に取った。

「う、うん？」

基本笑顔でいることの多い諒だが、今日はその笑顔が、少し怖い。

……私、何か怒らせるようなこと言った？

けれど、カクテルの甘みと酔いに紛れて、それ以上考えられなくなってしまった。

ただ、酔いながらもいつもと違う空気は感じていた。

私が飲みすぎそうになるとセーブしてくれるのが彼の常だったのに、今日はやけにカクテルを勧めてきて、そして絡んでくる。いったいどういう風の吹き回しだろう。

いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。明日、両親が来る。しかし紹介する相手がない。どうにかしなければいけないのに。

インフルエンザにでもかかったことにして、日を改めようか。いや、もうそんな場しのぎでは誤魔化せないだろう。

…駄目だ、考えるのもしんどい。

結果、私は酒に逃げた。パカパカとグラスを空け、あつという間に酔っぱらいの出来上がりだ。「大体ねえ！　いつも諒は偉そうに私にお説教するけど！」

「はいはい」

「諒はどうなの？　最近全然自分の話、しないじゃない」

「俺は相変わらずだ」

「相変わらずとつかえひつかえ？」

「それは大学の頃の話だろ。いつまでも子供みたいな遊び方はしてねえよ」

絡み始めた私の隣で、彼は涼しい顔で水割りのグラスを傾ける。

そんな彼を羨ましい、と思ってしまった。

「諒はいいね」

「何が」

グラスに残っていたカクテルを、一息に飲み干す。ぽ、と頬や頭に熱が灯って天井が揺れた。飲みすぎているのは、わかっているのだけれど。

「自由に結婚できるじゃない」

羨ましい。男だったら、行き遅れだなんだと言われることもない。うちがせめて普通の家だったら、こんな早いうちから追い詰められずに済んだのに。

そんな思いからつい零してしまった言葉は、諒に疑問を持たせたようだ。

「ちひろは自由じゃないのか」

じっと、射るような目で見つめられ、咄嗟に目を逸らす。こんな泣き言、言ったところでどうしようもないのに。

ただ、もう自分ではどうにもできない状況に、私も限界だったのかもしれない。

アルコールのせいではない熱が、じわりと目の奥に広がる。緩み始める涙腺。堪えるのは今日、何日目だろう。慌てて眉根を寄せたが、遅かった。

「ちひろ？」

諒の低い声が響く。肩を掴まれた拍子に身体が揺れて、ぼろりと涙が零れる。それで、籠が外れてしまった。

「結婚、させられる……」

「何？」

「遠縁の、分家の長男と。明日、自分で選んだ人を紹介しなかったら、結婚させられちゃう」

ぼろぼろぼろ、と言葉と一緒に溢れ出した涙は、もう自分の意思では止まらなかった。

結婚は子供の頃から夢見てた。綺麗な花嫁さんに憧れた。

いつか、誰かを好きになって、恋人になって、ちゃんと愛情を育てて結婚する……。それはとても当たり前でありふれた夢だと思っていたのに、今は手の届かないお月様のようだ。

「あんな人と結婚するのは絶対嫌。だから自分で相手を探そうとしているのにうまくいかない」

涙声おえつが嗚咽おえつに変わってしまった。泣き顔をそれ以上見せたくなくて、カクテルグラスを横によけ

るとテーブルに突っ伏した。

諒からの言葉はない。ただ、肩を掴んでいた手が、伏した私の頭に置かれ、驚くほど優しい手つきで髪を撫で続けてくれた。

そのおかげか、あるいは泣いて気が済んだのか、頭が徐々にすつきりしてくる。

「……落ち着いたか？」

「んー……」

諒の前で泣くのはこれが初めてではない。いつだって、失恋のたびに絡んで泣いて。なんだかんだで彼は朝まで付き合ってくれる。

「だけど、今さらと言われようと泣き顔を見られるのは、やはり気恥ずかしい。」

「ティッシュちょうだい」

カウンターの中にティッシュの箱があるのは知っている。顔を伏せたままでマスターに頼み、手を差し出すと、しばらくしてティッシュを数枚握らされた。こそそと涙と鼻水を拭う。

「はあ。ごめん、大丈夫。これまでどおり、なんとか両親の猛攻を躲してくわ」

それしかない。今までそうやって乗り切ってきたのだし、なんとかなるだろう。親の言いなりになつて結婚するのだけは嫌だ。

そうやって自分を奮い立たせているというのに、諒の声は冷ややかだった。

「いつまで？」

「……そりゃ、自力で相手を見つけるまで」

「それで？ また婚活アプリに頼るのか」

ぐ、と言葉に詰まる。

こつちを流し見る諒の目は声と違わず冷ややかで、彼の呆れが伝わってくる。

「……それは、もうしない」

「じゃあ合コンでも行くか？ また変なのに捕まりそうだな。ちひろは、とにかく男を見る目がな」

「わかっているよ、うるさいなあ。だから結婚を前提とした婚活アプリに頼ったんじゃない。それが駄目だったらどうすればいいのよ？」

いつもなら慰めて終わりになのに、今日の諒はなぜかダメ出しを始める。ぐすつと鼻をすすつて睨み返すと、彼がにやりと笑った。

「いい方法がある」

「なに？」

「俺と結婚すればいい」

数秒、ぼかんと呆けてしまった。そんな私を、諒がじっと見つめ返してくる。

「……は？」

え、冗談だよな？

そう考えたけれど、すぐにそれは違うとわかった。

諒は、人が真剣に悩んでいることにそんな冗談を挟んでからかったりしない。

でも、なんでそんな提案が出るのかはさっぱりわからず、クエスチョンマークが頭の中を飛び交った。

「え？ 友達なのになんで？」

思わず零れたストレートな疑問に、諒がぴくつと頬を引きつらせる。そういや、その顔、今日はよく見るような。

「……そうだな、友達だ」

「諒も結婚したいの？ 知らなかった！ でも諒なら相手に困らないでしょ？」  
なのに、なんで？」

いつの間にか顔ごと諒のほうへ向け、前のめりになっていた。すると「まあな」と呟いて、彼が突然顔を近づけてくる。ちよん、と鼻先がくつつくくらいの至近距離で、ちよつとびっくりした。

「え、何、これ」

「これくらい俺と顔を近づけても、少しも顔色を変えないのはちひろくらいだ」

……どうやらモテ自慢のようだ。つまり他の女の子はポツと顔を赤らめるということだろう。

確かに動じないのは私くらいかもしれない。諒がどれだけイケメンでも、私にとっては大事な友達で、それ以上でもそれ以下でもない。

見つめ合っている間、店内には静かなざわめきとBGMが流れていた。ずっと自分たちの話でいっぱいいっぱい気づいていなかったけれど、最初は私たちだけだった店内も、いつの間にか多くの人で賑わっている。マスターは込み入った話になった私たちを気遣ってか、グラスが空になっ

たときしか近づいてこない。

「……顔色を変える理由がないでしょ」

そう、そのはずなのに、沈黙と至近距離が、今まで諒には感じたことのない心のざわめきを生む。思わず目を逸らし、少し遠い位置にいたマスターに向かって手を上げた。

「同じカクテル、もうひとつ」

「かしこまりました」

諒もようやく顔を遠ざけ、マスターにブランデーのロックを頼む。

新しいグラスが揃ってから、深呼吸をし、話を戻した。

「ところでなんで結婚したいの？」

「会社でしつこいのに絡まれてる。俺は今仕事を楽ししいし、興味ないつつたら……」

「言ったら？」

諒が心底うんざりだという顔をした。

「ゲイじゃないかとか言いふらしやがった」

「ぶっ」

「お前……笑いごとじゃないぞ」

思わずカクテルを嘔きそうになった私を、諒が恨めしげに睨む。いや、しかし、確かにそれは嫌だろう。ごめん、笑って悪かった。

「女はめんどくさい。素っ気ないところが好きとか言いながら、付き合った直後から構ってくれない

だとかなんだとか不満を漏らすし」

「いやいや、そんだけ諒のことが好きなんですよ」

私の話はよく聞いてもらうけれど、諒の話はあまり聞いたことがないので新鮮だ。

珍しい諒の愚痴に、たまには私が聞き役になるべきだろうと耳を傾ける。ちびちびとカクテルを口に運んでいるうちに、泣いたことで少しは醒めていた酔いが、また脳を支配し始める。

「お前くらいサバサバしてるほうが多分俺には合ってる」

「いや、それは友達だからだってば」

実際、諒がどんな女性と付き合ったのか、本当に我慢ならなくらいに依存されたのか、知らないから判断はつかないけれど。

私と比べてもしょうがないでしょう、とけらけら笑う。けれど、諒は笑い話にはしなかった。

「だから、友達くらいがちょうどいい。ちひろなら結婚相手に最適だ」

どうやら、彼は本気で私と結婚するのがいい案だと思っっているらしい。真剣な顔で言われて、さすがに笑ってもいられなくなる。

「でも結婚って、そういうのじゃないでしょ。ちゃんと誰かを好きにならないと」

「出会って間もない男と愛を育てようとして失敗したんだろ」

「うっ、うるさいなあ！」

いちいち痛いところを突いてくるな！

ちよいちよいと心の傷をつつつかれて、またカクテルを啣あおった。

「俺は友人の中でも一番ちひろと気が合うし、誰より信頼してる」

拗すねかけていたけど、そのセリフがちよつとだけ私の気持ちを上向させる。

「……ふーん」

「俺は、女にべつたり依存されたくない。その点、ちひろとなら結婚しても友人関係を崩さないでいられるだろう？」

「それは、そうだけだ」

「お前はマイペースだし、連絡無精だしな。俺が連絡しないと、そつちからメールも電話もしてこないだろ。やれ連絡がないだのやれ寂しいだの、挙句、仕事と私、どっちが大事なのとか言い出すこともないだろうし」

言葉だけ聞くと貶はなされているようなセリフだが、酔いが回って気分がいいせいか、褒め言葉に聞こえてくる。

そこに、それまで他の客の相手をしていたマスターが、ちようど戻ってきて横やりを入れてきた。

「確かに友達夫婦ってよく言いますね」

「いやいや、友達みたいな夫婦って意味でしょ、それ」

本当に友達と結婚することではないはずだ。

「ちひろ、難しく考えないで、まず目の前の問題から考えろ。明日、両親に男を紹介しないと、その分家だかんだかの男と結婚させられるかもしれないだろう」

「そうだけど、でも諒は？ そんな結婚がほんとにしたいの？」

「結婚は自己責任だ。俺は俺の意思で結婚したいと思っっているんだから、ちひろは気にしなくていい。ちひろも、自分で相手を選びたいんだろう？」

そうして、三本、指を立てて見せた。

「お前にある選択肢は三つだ。分家の男、婚活アプリ、俺。まあ、婚活アプリで明日までに相手を見繕うのは難しいかもしれないが——どれがいい。お前が選べ」

にやりと笑って、諒は三本の指を軽く動かす。

「俺と結婚すれば、俺には都合が良い。お前も助かる。ウインウインだろ」

諒と結婚？ そんなこと考えたこともなかった。でも確かにいいかも……諒なら気心も知れてい  
るし、安心だ。

アルコールでふわふわしているせいか、なんだか最良の選択肢に思えてきた。

「……うん。いいね」

確かに、その三択なら諒しかいない。私は彼の三本目の指を握った。

後から考えれば、この頃にはもう正常な判断ができないうらい酔っぱらっていたのだ。

「じゃあ、決まりだな。乾杯」

諒がにっこり笑って、グラスを掲げた。私もそれに合わせてカクテルグラスを持ち上げて、く  
いと叫ぶ。

その後、これは『友達結婚』だ、先進的な結婚だと散々盛り上がったことは覚えているのだけ  
ど……

「……ちひろ。ほら、あと少し」

「ん……」

頭が重い。ぐらぐらする。足元が覚束なくて、隣にあるがっしりとした身体に、纏るようにしが  
みついた。私の腰には力強い腕が回されていて、そのおかげでぐにやぐにやになった膝でもどうに  
か歩けているようだ。

ぴっ、と電子音がして、扉が開く。中に進むとぼつと灯りがついた。それが眩しくて、目にも頭  
にも辛い。

「眩しい、頭痛い、やだあ」

ここはどこだ、とかどうやってここに来たのか、とかそんなことを考える余裕はない。ただとに  
かく早く寝転がりたかった。ここまで飲んだのは本当に久しぶりだ。

どさつと柔らかな場所に仰向けに寝かされる。やっと力が抜けてほつとしたけど、身体は不快感  
でいっぱいだ。誰かの手がジャケットの合わせを開き、私の身体をゆっくり転がしながら腕がせて  
くれた。

それから私がさつき文句を言ったからか、ちよつとだけ部屋の灯りが柔らかくなった。おかげで、  
頭の痛みが和らいだ気がする。けれど、横になつてのにくらくら眩暈がするし、たくさんお酒を  
飲んだせいか喉が渴いて仕方がない。

気がつけば「水、水」とうなされたように口にしていた。多分そばにいる人——諒が水を持って

きて飲ませてくれるだろう、と信じていた。

諒はいつだって私を助けてくれるから。

ふっ、と意識が落ちかけたけれど、私の顔を撫でる大きな手の感触にまた薄く目を開く。

「ちひろ。起きられるか？」

そう言われても、身体が異様に重くて腕を持ち上げるのもつらい。できない、と首を左右に振ろうとしても眩暈が酷くて、私は無反応でいるしかなかった。

すると、少しだけ時間がおかれた後。

「……んっ」

唇に冷たい感触が触れた。私の唇をぴったりと塞いだ柔らかい何かから、程よく冷たい水が流れ込んできて、私はそれを夢中で飲み込んだ。ただの水だろうに、ものすごく美味しく、甘く思えて、世界中で一番おいしい水に違いないと思った。

夢と現を行き来する。

時々、諒の声が聞こえる。身体の内側を締め付けるものがそのうちなくなると、少し楽に呼吸ができるようになった。

大きな手が私の額や頬を撫で、髪をよけてくれる。

諒の手は指が長くて関節が少し太くて、ごつごつしている。なのに、触れ方がとんでもなく、柔らかい。まるで宝物を扱うかのように。

だから思った、ああ、夢を見てるのだと。

諒が私に、こんな触れ方をするわけがない。

だけど、酔って火照った顔にはそのひんやりとした手のひらが心地よくて、思わず私のほうから頬を摺り寄せて、おねだりをしてしまった。

「さっきの水、もういつかい」

さっき飲んだのに、もう喉がカラカラで辛い。

また、唇が塞がれた。こくこくと飲み込んでから、キスされているのだと気がついた。水の後から口内に入り込んだ冷たい舌が、私の上顎を撫でたから。

……欲求不満なのか。諒とキスする夢を見るなんて。

思わず身じろぎしたが、諒の腕が私の頭を囲って固定する。最初はゆっくりだった舌の動きが、次第に激しくなり、舌を絡ませてくる。

息苦しくて、余計にぼうつとしてしまう。私の首筋に置かれていた手が、するりと撫でながら鎖骨まで降り、胸の膨らみに触れる。そこで初めて、自分が何もまどついていないのだと気がついた。

夢の中とはいえ危機感を覚え、逃げようとする。けれど、身体が動かない。

どうにか首を動かしてキスから逃げ出す。次の瞬間、熱い息が耳に触れて身体がぞくりと震えた。ねつとりと耳の縁を這う舌は、いつの間にか熱を取り戻し温かだった。

「ふ……うん」

絶えず舌先から送られる愉悅にぞくぞくし、何も考えられなくなる。

耳から首筋、鎖骨へと唇で辿られる。肌に触れる息は本当にこれが夢なのかと疑う熱さだ。

「……りよ、おっ」

胸にしゃぶりつかれ、背筋をよじらせてシーツを掴んだ。敏感な胸の頂を、温かな口内で舐られる。ざらついた舌が突起を押しつぶしたかと思えば唇が吸い上げ、そこから痺れるような熱が身体に広がっていく。

その間にも、もう片方の胸は手で揉みしだかれ、空いている手で胸の下から腰へと肌を撫でられた。

息が上がる。身体は思うように動かせないのに、腰だけが愛撫に反応してぴくりと揺れる。腰骨をくすぐられ身悶えたそのとき、ずっと口の中でいたぶられていた胸の突起に、歯を立てられた。

「あああんっ」

少し痛い。けれど、舌先がその痛みを和らげるように舐めてきて、甘やかされているような気持ちになる。その一方で、もう片方の胸の先が指先で摘み上げられて鈍い痛みを生んでいた。

頭がおかしくなりそう。気持ちいいのか、辛いのか、痛いかわからなくなる。

腰と臀部をくるりとひと撫でした手が、太ももを這い、今度は足の間へと近づいていく。

「ひあっ」

既に濡れそぼった髪はすっかり敏感になっていて、指先が触れただけで喘いでしまった。

くちゅ、くちゅと水音がする中、空気にさらされた髪を指が辿るのがはつきりとわかる。とろ、

と蜜が零れる感覚まで。

「う、あ、ああっ」

ちゅぱ、と音を立てて胸が解放される。諒は起き上がって私の足の間に身を置くと、片手で私の右足を掴みしっかりと開かせた。

指先が丁寧に、髪を辿るように行き来する。蜜口を探られ、腰が揺れる。まるで誘っているようで、恥ずかしくなって涙が滲んだ。

アルコールのせいなのか愛撫のせいなのか、膜がかかったようにはっきりとしない視界の中で、私を見下ろす諒の目が熱を孕んで揺らめいていた。

「……ちひろ」

私の秘所をいたぶりつつも、掲げた私の片足を抱き寄せる。

私を見つめながら内腿に口づけ、歯を立てるその仕草に、ぞくぞくした。秘所をなぶっていた指が、髪の際に隠れた花芽を探り出す。

「や、ああっ!」

身体の奥が収縮し、頭が一瞬真っ白になった。

激しい息遣いが重なり合う。身体に伸しかかってくる重みに、すぐに意識が呼び戻される。

唇同士が触れるか触れないかの距離で、彼の舌が私の唇を舐めた。

「……俺のものだ」

指を絡ませ合うようにして、私の手はシーツに縫い留められている。

「どこにも行かせない」

私の名前を呼び、そう囁いたその声は、とても優しく、ベルベットのように耳に柔らかでありな

から、強い意志を秘めていた。

「愛してる。……もっと早く、こうしていれば良かったんだ」

そうしてまた、酸素すら奪うような激しいキスに、私の意識は今度こそ深い闇に落ちていった。

人肌の温もりを久しぶりに感じながら、私はうつらうつらと微睡まどろんでいた。

頭の中に断片的に残ったシーンに、すごい夢を見てしまったと、ぼんやり考える。

朧おぼろげな視界で揺れた瞳、大きな手。

それらが諒のものだと思つたとき、はっと急速に目が覚めた。

「……あ、れ？」

どくどくどく、と心臓が早鐘を打っている。

めちやくちやリアルな夢だった。……夢、だよな？

いや、夢に決まつている。諒と私が、そんなことになるわけがない。

混乱する頭を軽く振れば、ずきんと激しい頭痛に襲われた。

「いつ……たあ」

とても起き上がれそうにない。ぎゅ、と目をつむつて額に手を当てる。

大体、ここは一体どこ。

視線を巡らせて、どうやらどこかのホテルの一室らしいと理解した。

でも、なんで、ホテル？

そう疑問が湧いたとき、すぐそばで男の低いうめき声が聞こえた。

「ん……ちひろ？」

びぎ、と思考回路が停止する。寝起きの少し掠れた声だけれど、確かによく知っている声だ。同

時に、私のお腹に絡みついていた腕の存在に気がついた。

「え……」

ベッドの中で背後から抱きしめられている。その現状を理解するために、ぼんやりとした頭を無理やりに叩き起こした。

今は、多分朝。さつきの声と、夕べ一緒に飲んだことから考えるに、今私を抱きしめているのは諒に違いない。

そう頭が判断すると同時に、慌てて上半身を起こす。いや起こそうとした。しかし、がっしりと私を抱える腕が案外力強くて、ぼふつと頭が枕に逆戻りしてしまう。

「わっ、ちよつと……っ！」

それでもどうにかベッドのヘッドボードを掴み、腕の拘束をそのままに上半身を捻って、まず自分の状況を確認した。

「……どういふこと」

裸ではない。が、私も諒もおそらく素肌の上にバスローブ姿だ。これは、どう判断したらいい？ 何かあったようにも思えるし、私をただ着替えさせただけのようにも見える。

え、何も、ないよね？ あれはただの夢だよ……？

心臓が、痛いくらいに跳ね始めた。手にじつとりと汗が滲む。

嘔吐でもして汚しちゃったから、自分でちゃんと着替えたとか……

昨日のことを思い出そうとしたが、ずきずきと響く頭痛に邪魔される。

今まで散々一緒に飲んで送ってもらっているけれど、こんな状況は初めてだった。さすがに戸惑いが隠せない。

「諒、ちょっと、離してって」

私の腰に絡みついたまま、再び寝息を立て始めた諒を見下ろす。がっしりとした身体と、伏せた睫毛の長さに異様にどきどきしてしまう。

……落ち着こう。

何も無いはずだ、私たちは友達なのだから。

そう自分に言い聞かせて、どうにか平静を取り戻す。

そう、何も無いのに狼狽えたりしたら、変に意識しているみたいでおかしく思われる。

とにかく、今日は土曜で私の仕事は休みだ。だから私はいいけれど、諒の仕事はどうなってるんだっけ。っていうか、昨日、途中から何の話してたっけ？

それすら今はつきり思い出せなかった。

深呼吸をして早鐘を打つ心臓を少し落ち着かせてから、今度はちよつと大きめに声をかける。

「諒？ 起きなくて大丈夫？」

諒は、建築デザインの仕事をしている。クライアントの都合もあるから、土日が必ずしも休日と

は限らない。いつもの諒なら、どんなに飲んでも仕事に支障を来すイメージではないが、この状況を見るに昨日は珍しく飲みすぎたのかもしれない。

まだ起きる気配のない諒の肩を、軽く揺すった。

「諒ってば。仕事は？」

「……ん」

はあ、とため息まじりの声が聞こえ、思わずびくつきと身体が震えてしまった。吐息がバスロープ越しに私の横腹をくすぐる。

これ以上このゼロ距離には耐えられない。

「諒っ！ 私は起きるからね！」

ぺんつと諒の頭を軽く叩くと、「いてっ」という声と同時に諒の腕が緩んだ。その隙にもう一度拘束からの脱出を試みたが、またしても叶わない。

「……ご両親との待ち合わせは昼だって言ってなかったか？」

掠れた声でそう言い、私の腰をがっしり抱いたまま諒が器用に起き上がる。そして反対の手を、私の前方斜め上へと伸ばした。どうやらベッド脇にあるナイトテーブルにスマホが置かれてあり、それで時間を確認したいらしい、のだが。

「わ、私はそうだけど、諒は仕事かもしれないと思って」

そう答えながらも、まるで覆い被さられるような体勢にカチンと固まった。

この距離感に、少しも戸惑わない諒にむしろ驚く。もしやまだ、寝ぼけているのだろうか。

喉仏の出た逞しい首が、すぐ目の前にある。私は息を詰めて早く離れてくれるのを待った。  
「休み言って言っただろ。昨日の話、忘れたのか」

「え、あ、ごめん……」

どうやら昨日聞いたらしいが、さっぱり覚えていない。

スマホで時間を確認した彼は、それでも起きる気になっただけ、ようやく腕を解いてくれた。私も息を吐き出し、身体の力を抜く。

「……なんか酔っぱらって面倒かけちゃったみたいでごめんね。私、帰るわ」

どっと疲れを感じた。とにかくいつもと違うこの距離感から逃げ出したい。

さっさと帰って……いやそれより先に実家に連絡を入れて、今日の予定はキャンセルだと伝えなくては。

今度こそベッドから足を下ろし、帰り支度を始めようと自分のバッグを探して部屋を見渡す。そこに、不思議そうな声がかかった。

「帰る？ なぜだ」

「え？ なぜって……」

「ああ、服か。確かに仕事用のスーツじゃまずいな。このショッピングフロアで揃えよう。その前に朝食だな」

私は眉を寄せて、諒を見上げた。私の隣に寄り添おうとしてくるから、思わずお尻をずらして距離を取る。

どうも、会話がかみ合っていない気がする。が、そう感じたのは、諒のほうも同じらしい。じっと数秒見つめ合った……というより睨み合った後。

「お前、昨日のこと、どこまで覚えてる？」

「えっ？ どこまでって……なんか記憶が飛び飛びではつきりとは」

正直にそう言うと、彼は呆れたように眉尻を下げる。それから何かを考えこむように口元に手を当てた。

「……ここに来たのは？」

「いや、気がついたら朝だった……感じ……」

答えながら思い出したのは、夢の断片。途切れがちではあるけれど、生々しく淫靡な光景が一気に蘇る。

夢の中の熱っぽい諒の瞳が、目の前の現実の諒と重なり、かあっと身体が熱くなった。

「ちひろ？」

「いや！ なんにも覚えてない、寝てた！」

「だろうな。よく眠ってたからな」

慌てて答えたので、少し声が上がってしまったが、その後の諒の言葉に心底ほっとした。やっぱり、熟睡してたのだ。変な夢を見るほどに。

「……ねえ、もしかして、これに着替えさせてくれたのって」

「文句言うなよ。苦しいしんどいってごねたのはお前だからな」

「……すみません」

何もなかったのは良かったが、どうやら裸は見られたらしい。かといって文句を言える立場でもなさそうだ。

熱くなった頬をこつそりと手で扇いでいると、再び諒が問いかけてきた。

「店での話は？　ちゃんと覚えてるか」

「え？　なんか大事な話した？」

そう言うのと、諒の目が細められ、冷ややかなものになる。

「え、何？　なんかまずい？」

こめかみに手を当てて、記憶を掘り起こす。確かカクテルを飲みすぎて、酔っぱらい、いけすかない遠戚と結婚させられるかもしれないと話してしまった。それは覚えている。しかも、泣きながら。

情けない、もう深酒はやめよう。

そう心に誓いつつ、更に記憶を辿っていると、諒がヒントを寄越した。

「……三択。お前が誰を選んだか覚えてないのか」

「は？　三択？」

一体、何の話？

首を傾げたが、それがキーワードのように働いて、ぼんやりとそのときの諒の顔が頭に浮かんできた。そこから芋づる式に昨夜の会話が思い出され、目を見開いて諒を見つめる。

『結婚は自己責任だ。俺は俺の意思で結婚したいと思ってるんだから、ちひろは気にしなくていい。ちひろも、自分で相手を選びたいんだろう？』

そう、夕べ、この顔でそんなセリフを聞いた。

泣きすぎて瞼が腫れてヒリヒリしていたのを覚えている。

『俺は友人の中でも一番ちひろと気が合うし、誰より信頼してる』

『俺は、女にべったり依存されたくない。その点、ちひろとなら結婚しても友人関係を崩さないでいられるだろう？　お前はマイペースだし、連絡無精だしな。俺が連絡しないと、そっちからメールも電話もしてこないだろ。やれ連絡がないだのやれ寂しいだの、挙句、仕事と私、どっちが大事なのとか言い出すこともないだろうし』

そうだ、そんなことを言っていた。自分も、面倒な女に付きまとわれて困っているから、私みたいなタイプと結婚できれば都合がいいのだと。

そうして三択を迫られた。私は自分で諒を選び、彼の指を握ったのだ。

嫌な男と結婚せずに済むことにほっとして、盛り上がって散々飲んで、そして酔いつぶれたのだろう。それ以降の記憶を辿るのは無理だった。

「思い出したか？」

頭を抱える私を見て、諒が喉を鳴らして笑う。

「途中までは……ここどこ？」

「ハイアークホテルだ。気が利くだろう」

なんと私が両親と待ち合わせているホテルだった。この和食レストランに予約を入れてあるのだ。

「俺との結婚に合意したのは覚えてるな？」

「諒が前屈まへかがみになり、私の顔を覗き込んでくる。

覚えていまずとも——私は眉間にぐっと力を入れた。

いくら酔っていたとはいえ……追い詰められていたとはいえ！ どうしてそんな結婚にそこまで乗り気になれたのだ、私！

「……酔っぱらいコワイ」

「俺は酔ってなかった」

諒がきつぱりと言いつ切るものだから、どきりとする。

酒のせいにしてなかったことにするつもりかと、咎とがめられている気がして罪悪感が生まれた。

いや、でも、酔ってるときにそんな選択をさせる諒も悪い。

「これ以上ない良案だろう？ それに、友達が望まない結婚を強要されるのを黙って見てられないし」

むしろ私のためだと言いたげだ。

「だからって、諒と結婚なんてできないでしょ、別に恋人ってわけじゃないんだから。だって結婚って……」

つまり、結婚するということは、昨夜の夢のようなことも現実になるのだ。それを考えたら友達

と結婚なんて、ありえない。

口に出しては言えなかったが、顔も耳も火照ほてり出した私を見て察したのか、諒はにや、と意地悪な顔で笑った。

「ちひろが望むなら、俺はもちろん、そういうこともありで構わないが」

「は？ え？ 何言って」

急に諒の手が私のバスのロープの紐に伸びてきたので、咄とつ嗟さに後ずさって逃げた。だが、彼の手が紐をほどくことはなく、指でくると弄もよほすだけですからすぐに離される。

今度はその手が私の目線まで持ち上げられて、ぴんつと額を弾かれた。

「いたっ！」

「冗談だ」

くつくつ、と肩を揺らして笑われ、かあつと顔が熱くなった。

「ちよつと！ こっちは真剣な話してるんだから、からかわないですよ！」

憤慨して声を荒らげたが、失礼なことに諒はそれでもおかしそうに笑っている。

「お前が変に重く受け止めるからだ。一時避難的な結婚だと思えばいい。ちひろはそれで嫌な男との結婚から逃げられる。俺は面倒な女を追い払えるし、ゲイ疑惑も払拭できるしな」

「……え？ あ、そういうこと？」

ようやく、諒がそんな結婚を言い出した意図がわかった。つまり、便宜上、一時的に夫婦のフリをしよう、ということだ。

ほっとして、肩から力が抜ける。

そういうことなら、友達結婚なんて言い出したのも理解できる。大きく息を吐いた私を見て、諒が少し口角を上げて笑った。

「だけど、一時的といっても全く問題がないわけじゃない。

「でも、本当に籍も入れちゃうことになるよ？　うちの親、疑い深いから絶対にそこまで確認すると思うし」

「婚姻届もちゃんと出す。俺だってそのほうが助かるからな」

「でも、後で本当に好きな人ができたら？」

私はともかく、諒に好きな人ができたら迷惑がかかる。

「……そうだな。じゃあ、どちらかに真剣に結婚したい相手ができるまで——そう決めておくのは？」

「バツイチになっちゃうよ？」

「今時珍しくもないだろ」

なんでもないことのように、ひょいっと肩を竦める。まあ、確かに今のご時勢、バツイチは珍しくもない。もしかしたら再婚するときにネックになるかもしれないけれど、何にせよバツイチくらいでダメになるような相手なら結婚しないほうがいいだろう。そもそも、そんな未来のことよりも差し迫った分家の男との結婚を回避するのが優先なわけで……

そう考えたら、この提案に対しての異議は、なくなってしまった。

……いいの？　本当に？

諒さえそれでいいのなら、私のほうは助かる。

悩んでいる間にも、刻一刻と時間は過ぎる。実家からこつちまでは新幹線で二時間ほどだ、中止にするなら早く連絡をしなければ両親が家を出てしまう。

「私のスマホ……」

どこだ、と顔を上げると、ベッドサイドのテーブルに置いてあったようで、諒が私に差し出した。スマホの時刻表示は七時三十五分、新幹線に乗るまでの時間も考えれば九時前には家を出るだろう。

今ならまだ間に合う。逃げられたとは言えないから、都合が合わなくなったと言うしかない。だけど、それじゃあすぐに次の約束を持ちかけられるに決まっている。

本当に諒が協力してくれるなら、これまで散々悩まされたプレッシャーから解放されるのだ。

ごく、と溜まった唾を呑み込む。そして、ぎゅっと、膝の上で手を握った。

「……わかった。親に会って。よろしくお願いします」

その後のことは、また後で考えよう。今は、きつとこれがベストだ。

意を決して諒に向かって頭を下げる。

すると、ふっと笑った気配がして、ぽすんと頭に手が置かれた。

「とりあえず、シャワー浴びてこい。それから何か食いに行こう」

くしゃくしゃっと私の髪をかき混ぜる。

諒の手は大きくて優しく、温かだ。友達なのにこんな甘え方をしていいのかと申し訳なく思う。諒は本当に、迷惑じゃないのかなあ。

まだ迷いを残してはいたが、夕べの酒の余韻が残っているのか、頭がうまく働かない。

「……わかった」

とにかくシャワーを浴びて、頭をすっきりさせることにした。

脱衣所で、バスロープの合わせを開く。なんとなく、自分の身体を見下ろした。

ブラジャーは外されていたけど、下はちゃんと穿<sub>は</sub>いている。あの艶<sub>なま</sub>めかしい夢の痕<sub>あと</sub>はなかった。

「……夢、だよな」

霧<sub>もや</sub>がかかって、はつきりしないけれど、断片的に熱い息遣いや諒の声が耳に残っている。

きつと、結婚なんてことになったから変な夢を見たんだ。

ふるりと頭を振って、頭の中の映像を振り払う。バスロープを脱ぎ捨て熱いシャワーを頭から浴びて、肌に残る夢の余韻を洗い流した。

その後、朝食を済ませてからホテルのショッピングフロアに連れ出され、フォーマルなワンピース一式をそろえ、身支度も万端。しかも、自分で払うと言ったのに、強引に諒に払われてしまった。こんなに甘えてしまっただろうか……

こうして昼の十二時を少し過ぎた頃、私の両親をふたりで出迎えたのだった。

和食レストランのお座敷で、テーブルを挟んで両親と向かい合う。大きな窓からは美しく手入れ

されたホテルの中庭が楽しめる。といっても、真冬のこの時期はどこか物寂しい雰囲気だが、それもまた趣<sub>おもむき</sub>があった。

テーブルの上には、食前酒と色鮮やかな先付けの小鉢が並ぶ。店員が下がったところで、諒が一度座布団から下りた。

「高梨諒と申します。ちひろさんとお付き合いをさせていただいております」

ロビーでも簡単に紹介は済ませていたが、改めて名乗って背筋を正す。父は難しい顔をしたままだが、母が笑みを浮かべて座布団を勧めた。

「昨年、娘から聞きました。それまで結婚を考えている方がいるなんて全く聞いていなくて、驚いてしまっただけ……いつからお付き合いしてるのかしら」

「お嬢さんとは大学で知り合っただけですが、二年前、私のほうから結婚を前提にお付き合いを申し込みました」

「まあ、こんな素敵な方が、どうしてちひろに、ねえ……」

……失礼な。

「心根の優しい、温かな女性です。なかなか顔みてくださいさらず……そんなところにもますます惹かれました」

一体誰の話をしているのだろう、自分のことのような気がしない。諒の言葉で聞くと、私がとても貞淑で、素敵なお嬢様のように思えてくる。

ふたりの馴<sub>な</sub>れ初<sub>そ</sub>めに関しては、今朝モーニングビュッフェを食べながら打ち合わせておいた。

筋書きどおりに答える諒は、少しも狼狽<sup>うろた</sup>えることがない。大嘘を吐いているというのに大した心臓だ。

私のほうはというと、バレやしないかと気が気じゃないのと、自分のこととは思えない褒め言葉に胃がしくしくと痛んできた。

だけど、母と諒でうまいことや取り取りを終えて、父がこのまま黙っていてくれれば、とりあえずこの場は凌<sup>しの</sup>げる。そうなることを願っていたのだが――

「その年になってまだ結婚相手も見つからないのかと心配し何度も尋ねたが、ちひろの口から君の名前が出ることはなかった。二年も付き合っておかしくないかね」

ぎくりとして、顔が強張<sup>こわば</sup>った。

父の言うとおりに、本当に付き合っていたのなら、こうなる前に諒の名前が一度くらい出ていてもおかしくない。だけど、不幸中の幸いだったのは、これまで付き合った相手の名前を一度も両親に告げることがなかったことだ。

「付き合ってるなんて言ったら、すぐ会わせるって言うから黙ってたの」

「当たり前だろう。行き遅れるんじゃないかと心配してやっってるのに」

心配してやってる、って何。

かちん、と来たけど、ここで喧嘩をするわけにもいかない。どうにか深呼吸で気持ちを落ち着かせる。

「だから、心配はかけたけど……」

今会わせたんだからもういいでしょ、と投げやりに答えそうになったとき、諒が父に向かい堂々と答えた。

「私ではまだ頼りなく、ご両親に紹介することはできないと考えていたのだと思います。とても堅実なお嬢さんで、本当に私にはもったいないと身が引き締まる思いが致します」

ちよつと持ち上げすぎだと言いたくなるようなセリフで、聞いているこつちがむずがゆくなってしまう。

よくそんなセリフを考えつくなあとちらりと横目で見たら、まっすぐ父を見ていた目が、ふいに私に向けられた。

どきん、と鼓動が跳ねる。お芝居にしてはできすぎなくらい優しい目で、まるで恋人を見つめるような表情だった。

迫真の演技すぎて、心臓が悪い。思わず諒の視線から逃げて、父へと戻した。

「諒が頼りないとか、そんなことは思っていないから」

照れてないで私も少しは援護射撃をしなければと口を出す。けれど、父が鼻で笑った。

「大学で知り合ったってことは、お前と同じ美大だろう」

「美大の何が悪いのよ」

「ふん、美大なんぞ出て、大した仕事に就けるとは思えん」

再びかちんと来る。今度は頭の中でバトル開始のゴングが鳴った。

私が馬鹿にされるのはいい加減慣れているけれど、紳士的に両親に筋を通そうとしてくれている

諒まで馬鹿にするのは許せなかった。

「諒はちゃんと建築デザインの道に進んで身を立ててます。尊敬できる人だから」  
声高に主張する。これは本当のことだ。私は結局事務職にしか就けなかったけれど、諒は希望の職種に就けた。それは、諒の努力と才能の賜物に違いなく、誰かに馬鹿にされるいわれなどはないはずだ。

父に対する長年の反発心もあり、つい口調がきつくなってしまふ。さらに言い募ろうとすると、横から伸びてきた諒の手が私の手に重なり、宥めるように握られた。

「ご心配のほどはわかりませう。おそらくちひろさんも同じように考えて、これまでご両親に紹介することをためらわれていたのだと思います。ですが今季からようやくアートディレクターの仕事に任されるようになり、こうしてご挨拶の許可をいただきました」

……ちよつと。それではあまりにも、私から目線じゃないだろうか。

傍から見れば、『こいつとんだけ自分がいい女だと思ってるの』と白い目で見られそうだが、

だが、どうやら自分の娘が優位に立っていることが、父の矜持を満足させたいらしい。

「当然だ。そこいらの男に媚びを売るような娘には育てていない」

あなたの娘は婚活アプリに頼り、しかもそれなりに媚びを売ってましたスママセン。

——という皮肉は当然呑み込み、ビール瓶に手を伸ばす。ようやく父が少しばかり表情を軟化させたのだ、この機会を逃してはいけない。

「もういいでしょ。それより早く食べないと店員さんが困るでしょう」

「そうね、ほらお父さん」

母が横から父にグラスを持つように促す。諒も近くにあった瓶を手にして、父のほうに向けた。

父はすつとグラスを前へ差し出した。

……やった。

父が気に入らない相手から酌を受けることはない。今日の首尾としては十分すぎるほどの成果だ。それは母も見えていてわかったのか、私に向かって微笑む。

『よくやったわ』なのか『良かったわね』なのかはわからないけれど、その微笑みから察するに母も満足したらしい。

良かった、どうにか今日は乗り切れた……多分。

安堵の息をそつと漏らすと同時に、肩の力が抜けた。

それから、諒は上手に父と私を持ち上げた。そうしておきながら自分の仕事のことを語り、途中からは父と忌憚なく語り合うまでになっていた。

食事が終わる頃には、いつ籍を入れるのか、と父のほうから先走った話をするほどになっていたのである。

食事後、少しの時間だったが両親を観光に連れ出し、その後新幹線の駅で見送った。

「うまくいったな」

「いきすぎだよ……」